

# 異年齢保育の中の子どもたち

## Children in a Mixed-Age Group

鹿児島女子短期大学 坪井 敏純

大心寺二葉保育園 山口 郁

はじめに

少子化に歯止めがかからず、2004年には合計特殊出生率は1.29まで下がっている。そのためきょうだいの数は減少し、隣近所で遊ぶ仲間は少ない、場合によってはいないといったことが生じている。このような上下関係を含む子ども同士の関わりが少なくなることは、社会性の発達にマイナスの影響を与えるのではないかと危惧されることが少なくない(森、2002)。同様の指摘は1982年に発刊された「たてわり保育その実践と理論(鈴木政次郎・高杉自子・荒井洌(編))」でもすでに、たてわり保育が求められている背景として、当時の合計特殊出生率1.74人を上げて、きょうだい数の減少を指摘している。そして失われつつある、多様な仲間関係と、多面的な友人選択より、年長児には年少児へのいたわりと思いやり、さらにはリーダーシップを育て、年少児にはモデリングによる学習や、年長児の言動によって成長への刺激や啓発を受けて、生活習慣の自立をはじめ新しい活動への意欲を生み出すと指摘している。このような異年齢保育のメリットは最近発刊された「こんな時どうする異年齢保育(現代と保育編集部(編),1999)」や「コミュニケーションの力を育てる異年齢保育(高橋・藤戸,2002)」などでも多くの例が示されている。

きょうだいは対人関係を学ぶ最初のきっかけであり、今日のような激しい少子化が到来するまでは幼稚園や保育園に入園してくる子どもたちは、家庭のきょうだい関係や近所の仲間関係を身につけて、あるいは経験しながら、園生活を送っていたのである。これまで家庭や地域では特に意識しなくても子どもの成長を支えていたことが、少子化によってあらた

めてクローズアップされる結果となった。

確かに、最近の親の育児態度に問題があるケースも多いが、以前の親ならいちいち子どもに教えなくても子ども同士で育ってきたことが多数あったことも確かであろう。ところがきょうだいや異年齢で交わることが少なくなればなるほど、すべて親(保育者も)が直接教えなければならない事態になっているのである。

私たちは何かを始める時には、どんなかたちであれ「意欲(動機)」が必要である。子どもにとって、例えば基本的生活習慣などはなぜそんなことをしなければならないのかを理解する前に要求されることになる。つまり目的の分からないことを、させられるということになる。そこで、もともと子どもにとってやる気の起こらないことをさせるわけなので、なかなか乗って来ないということがおきる。結果として下手をすると、非難と怒鳴り声の毎日が繰り返されることで、監視役と囚人という人間関係が形成され、子どもの生活には自主性・自発性とは無縁な世界が作り出されていくのである。保育者と子どもとの信頼関係は望むべくもないであろう。

では基本的生活習慣を身につけようとする意欲などは、子どもから湧いてこないものなのだろうか。そんなことはないのである。例えばきょうだいならば、上の子を見て下の子は育つし、年少児は年長児の行動をまねして遊ぶ姿はどこにでも見られるのである。つまり異なる年齢の友達と関わることは、年下の子どもにとっては自分の近い将来への目標を目にすることになり、成長への手本を与えてくれるのである。この成長しようとする意欲こそが、子どもの生きる原動力といっても過言ではない。ところが年

年齢別保育ではこの手本がない。逆に年長児にとって頼られる（手本の）立場も経験しないことになる。

この点は保育所保育指針の第二章「子ども自身の発達」に人との相互作用の重要性が上げられている。ただもう少し積極的に言えば、子どもの学ぶ環境は、保育士が直接的・間接的に教える場面だけでなく、子ども同士が学び合う環境も時には意図して作る必要があるのではないだろうか。子どもにとって学びやすい環境として異年齢児との交流をもっと大事にすべきである。家庭でも、地域でも、保育園でも年齢別保育を保育時間のほとんどで続けることは、多様な人間関係から学ぶものをさらに剥ぎ取ってしまう結果になっているのである。

年齢の違う子どもたちが一緒に生活する幼稚園・保育所では、その違いを超えて子ども同士が関わり合うことは自然なことであって、なにも特別なことではないはずなのである。汐見稔幸（1995）が指摘しているように、同年齢の仲間集団は、時として競争集団となり、場合によっては横並び主義から異質な物ものを排斥する関係を生み出しやすい関係をもちやすいが、異年齢集団ではもっと多角的で多様な関係を生み出す。そして競争ではなく協調と共同の関係が生まれやすいということも確かである。

このような異年齢保育の試みは、少子化の進行と共に、年齢別クラスが編成できないためにやむを得ず導入されたり、延長保育や預かり保育では必然的にひとつの部屋で異年齢の幼児がふれあう機会が生み出される。また制度上の点からも家庭的保育や小規模保育所といった年齢別保育を前提としない保育が今後増えてくることは推測される。

本研究は、大信寺二葉保育園の子どもたちに、同年齢保育では生まれにくい、援助をしたり、依存をしたりする中で自我の発達を促すと共に、仲間との関わりを広げ、自然な人間関係が形成されることによって保育園全体が安心していられる場所になって欲しいという願いから行われたものである。報告するのは異年齢保育をはじめ導入してからの2年間の実践記録であるが、特に異年齢保育の中で見せる

子どもたちのさまざまな姿を追い、異年齢保育の持つ意味や影響を考察する。

表1 クラスの構成

組	ひよこ		桜	桃	梅
年齢	0歳	1歳	2歳児	3歳児	4歳児
園児数	3	15	15	19	29
保育士	1	3	2	1	1

## 方法

### 保育園の概要

調査保育園は定員60名で、表1のクラス構成となっている。5歳児クラスがない理由は、この地域では全員幼稚園に入園する慣例のためである。従って一般的に呼ばれている「年長」クラスはなく、「年中」クラスの子どもたちが一番上のクラスとなる。

### 異年齢交流の方法

3、4歳児を中心に週一回（午前中）の時間帯で、ふれあいあそびや集団あそび、わらべうたあそび、リズムあそび、製作活動、散歩等を計画し、あそびの内容によっては、3、4歳児全員を混合2クラスにして活動をする。また、いっしょに食事を摂ったり、生活を共にする時間も少しずつ設けて保育を行ってきた。また保育士は基本的には子どもたちの中に入り、異年齢で遊ぶ誘いや働きかけを行った。

本研究は平成13年度から取り組んできた異年齢保育（3・4歳児）について、平成15年度までの実践記録を中心に報告する。

期間 平成13年4月～平成15年3月

（設定時間・方法）

#### 1. 13年度

- (1) 9:10～9:30（週2回程度）
- (2) 10:00～10:30（週1回）

#### 2. 14年度

- (1) 10:10～10:50（週に1回、3、4歳児を中心に）
- (2) 16:30～18:00（8月より、縦割り保育の時

間に遅番の保育者が中心となり、集団あそびをする。

(3) 8月より週1回会食を共にする。(3、4歳児)

(4) 10月より週1回、生活を共にする場を設け、午睡までを3、4歳児でいっしょに過ごす。

### 結果と考察

この園では初めての異年齢保育で、保育士自身も手探りの状態であった。同様に子どもたちも戸惑い、混乱を生み出したことも確かであるが、これまで同年齢の間では見せなかった様々な姿が現れてきた。その姿をいくつか紹介して、異年齢保育が幼児にどのような影響を与えていくか、またその援助のあり方を考察する。

#### 1. 年長児

(1) 年長児であることを意識することで自信をつける子

「A(4歳児)ちゃんは、給食時間に自分の隣に座った3歳児Nちゃんに『これ食べなさい!、大きくならないよ』とお姉さんぶり、すまし顔で常に声を掛けていた。」

「Aは同年齢同士の中では、自分の意思を十分伝えられない部分もあって積極性に欠けるが、年下の子が入ると表情も生き生きとし、相手に指示する言葉が多い。年下の子といっしょに生活を共にすることでAちゃんが自分に自信を持つことができるようになり、同年齢の中でも活発にあそぶ姿がみられだした。」

年長児であることを意識することで、年長児であろうとする態度を生み出すことは、異年齢保育の重要な特徴である。しかし、逆に保育士が年長児に自信を持たそうとしてプレッシャーとなるケースも報告されている(古城加代子、2003。川上隆子、2003。藤岡教子、2003。石田圭子、2001。矢田法子、2000。椎屋仁美、2000)

(2) 同年齢ではトラブルも多いが年下の子だとス

ムーズにあそべる子

「3歳児Kくんが砂場であそんでいる時、同じクラスの子が黙っておもちゃを持って行ってしまった。するとKくんはすごい勢いで怒りだし、すぐに取り返しに行った。しかし、次に1歳児Sくんが持って行こうとすると一瞬にらみつけていたが、Sくんだと分かるやすぐわらかい表情に変わり自分の使っていたおもちゃまでも渡し、かかわりを持とうとしていた。」

「Kは同年齢の中ではどうしても競争心が出てしまい衝突も多い。また、物の貸し借りうまくできないところがある。しかし、年下だといとおしきや優しい気持ちがでてくるよう優しく接することができる。また、下に1歳の妹がいて日頃から接し方ある程度理解している。」

このような年少児に対する優しい行動は、異年齢保育を取り入れる目的のひとつとして多くの実践例がある。(椋山ひとみ・中野智美、20004。山元ルミ、2003、鈴木・高杉・荒井(編)、1982)

年下という弱い者への援助行動は異年齢保育の中では5歳児と3歳児で比較的早くから見られるが、年齢が近くなり、心身の差が少なくなるとライバル意識から援助行動が現れにくいような傾向があるのではないだろうか。

(3) 年下の子への不適切な援助行動

「4歳女児数名が2歳児Rくんを靴をはかせようとするが、Rくんは嫌がって泣く。Rくんがひとりあそびをしても、抱っこしようしたり、三輪車に乗せようしたりと常について回り、世話をやきたがっているがRくんは泣いて逃げている。」

「現在Rくんは自分の意思を態度で示し、4歳女児たちがよってきても『いや』と言い拒否するようになり、嫌なこと、楽しいことなど気持ちを伝えながらあそぶようになった。また、

その姿を見て4歳女兒たちも無理にあそぼうとすることはなくなり、Rくんの様子を見ながらかかわることができるようになってきた。」

「今まで赤ちゃん扱いにしたり、人形のように思っていたものが次第に意思をもち、自分の思うようにならなくなってしまったことが3、4歳児なりに少しずつ理解できているようである。年下の子の成長を受容していくことが今後の成長につながっていくものだと思った。」

このような4歳児の女兒が示す優しい心を育てるためには、援助しようとする気持ちをほめると同時に、適切な向社会的判断と行動を教える必要がある。例えば乳児や障害児保育では、関わる相手との関係を作るためには、相手を理解し、偏見や先入観を取り除くことが重要である(米倉茂子、2004、上野千津、2003、古城加代子、2003)

#### (4) 年下の子との関わりを取りにくい子

##### ① 年下の子と遊ぶのをいやがる子

「Rくんが4歳児に進級し少し経った頃、Rくんが3歳Kくとふれあいあそびをすることをいやがり、手をつなごうともせず同年齢の子や保育者を求めてきた」。

「4歳Rくんが他児といっしょに、こおり鬼をしているとそこへ3歳Kくんが「いれて!」と言ってやって来た。すぐ『いやだ!』と拒否し、あそびが始まってもしばらく無視していた。しかし、Kくんがルールを理解しはじめると急にかかわりだす姿が見られた。」

「ひとりっ子で年下の子にどうして接して良いのか分からず、日頃の様子から見ても思い通りにならないとあそびが長続きしないという面も見られる。年下の子に自分のあそびを邪魔されるという気持ちがあるようだった。」

##### ② 誘われれば入るが、自分からは入ろうとしない子

「入所当初からおとなしく、自分からあまり話し掛けることもせず、友だちから話し掛けられても笑っているだけのことが多い4歳Hちゃん。保育者の「Hちゃんもする?」という言葉に嬉しそうにうなずき、楽しんであそび始めた。」

##### ③ 仲間に入っても、すぐ出たり入ったりする子

「3、4歳児で鬼ごっこをしていたが、物足りなさを感じた4歳Rくんが『こおり鬼がいい!』と言いだし、他児がそれに賛成しないと『もうしない!』と言ってやめてしまった。いっしょにあそびたいと思う気持ちはあるようで、かくれんぼやだるまさんがころんだといったあそびに変わると『ぼくもする』と言って入って来るが、長続きしない。」

##### ④ 「鬼ごっこなどで、追いかけれ逃げることは喜ぶ3歳Rくんのだが、自分が鬼になり逃げ足の速い4歳児などをつかまえられないことが続くとやめてしまう。しかし、他児が鬼になると、またいつの間にかあそびに入ってきて楽しんでいる。」

年少のきょうだいがいる年長児は、比較的スムーズに年下の子と関われるようである。しかし仲間同士の関係は子ども自身が形成し維持していかなければならない。特に異年齢の場合は、先ずは年長児が年少児を遊びの中に入れる工夫が必要であり、トラブルを解決していけるだけの技能が要求される。そのため異年齢保育を取り入れた初期の段階では、保育士の援助や遊び環境の設定に工夫が求められる。

異年齢児と一緒に活動することをいやがる年長児を無理に遊びに誘う必要はない。異年齢保育という枠をはめ、保育士自身が異年齢にこだわってしまい、「異年齢保育の時間だから」と異年齢で遊ばせようとしてしまうことが多い。このようなこだわりを捨てることから異年齢保育は始まる(緒方三桐、2001。会沢美鈴、2002、緒方三桐、2001、桐谷浩一・松田

有紀、2000)。

異年齢保育は年齢別活動を否定するのではなく、年齢の壁を取り払うあるいは低くすることで、多様な人との関係を生み出し、共に育つ環境を作ることがひとつの大きな目標である。もうひとつの大きな意味は、年齢を基礎とした活動を見なおし、育ちの場を柔軟にしようとするものである(三島美貴、2004、川上隆子、2003。藤森平司、2000。藤明美、2000)

## 2. 年少児

### (1) 入る段階で抵抗がある子

「クラスの中では、わりと活発な姿を見せる3歳児Mちゃん。異年齢の中に入ると、とたんに何もしようとせず保育者を上目使いでじっとみつめたり、その場に座り込みだだをこねて泣いてみたりといった行動が見られる。保育者の言葉掛けで中に入ることはできるが時間がかかる。しかし、一旦中に入ってしまうとたのしそうな表情であそんでいる。」

「入りたいと思う気持ちを受け止め保育者が代わって言葉にし、伝えていき、いやがる場合は、しばらく様子を見て、他児が楽しんでいる様子を見せながら、また誘っていくようにした。すると回を重ねる毎に抵抗も少なくなってきたようである。」

### (2) 異年齢とのかかわりをいやがり、ひとりあそびをしてしまう子

「3、4歳児で円をつくりうたあそびを始めると、手をつなぎたがらず近くにあった積み木であそび始めた3歳児Rくん。保育者が何度となく誘ってもいやがり、中に入ってこなかった。同年齢でもあそびが長続きせず、自分の興味のあるあそびを次々としていることが多い。言葉の遅れから友だちとのコミュニケーションがうまくとれない。」

「Rくんなりにひとりあそびを楽しんでいるようなので、無理に異年齢の中に入れることは

せず、時々興味を引くような言葉掛けをしていた。初めは何とか異年齢の中に入れようとしたため、ひどくいやがってしまった。色々なあそびの中で運動あそびには比較的興味をしめしたため、少しずつ繰り返し言葉を掛け誘っていったところ、短時間だがいっしょにあそぶことができた。」

年少児の場合、異年齢との遊びでは自分の思いどおりにならないことや自分を出せなくなって萎縮してしまう子も見られる(東郷美之、2003。川上隆子、2003)。この子の場合は、同年齢の仲間との関係も作りにくいというケースであるが、異年齢保育をするにしても、同年齢の仲間関係がしっかりできることが逆に異年齢活動を充実させるという指摘がある(川上隆子、2003、緒方三桐、2001)

### (3) 年上の子に頼って自分の力を発揮しようとしていない子

「3、4歳いっしょに運動あそびをしたところフープ跳び、とび箱跳びなどひとりでは全くしようとせず、手をつないでくれることを待っている3歳児Aちゃん。日頃あそんでいる時は高さのあるロケットすべり台も時間をかけ登れるのであるが、異年齢といっしょになると『「こわい」と言って、挑戦しようとしなない。』

「クラスの中でも他児から赤ちゃん扱いをされていて、本人もそれ程嫌がる様子もない。3人兄弟の一番下で、他の兄弟と比べいろいろな面で遅れがあり家でも赤ちゃん扱いにされているようだ。そのため依頼心がとても強い。」

「保育士も、日頃の生活の中でも赤ちゃん扱いはせず、時間がかかっても自分のことはできるように見守り、できた時はほめるようにしている。そしてどうしてもできないところだけを援助している。」

「ところが、進級して4歳児になり一番上のクラスとなった。進級したとたん今まで自分がしてもらったことを年下の子にできるように

なり、年上だという意識自覚もでてきた。年下の子とのかかわりの中で勇気や自信もでてたくましく成長してきた。同年齢の中でも他児を押しつけ大きな声でうたったり、積極的に前に出ること多くなり今後の成長が楽しみである。人間関係のたてのつながりがいかに大切なものかということを実感した。」

年長児の(1)の例と共通している点は、年長児であることを意識し、それに見合った行動をしようとする意欲が生まれたことである。保育士側から年長児に、リーダーシップを持たせたいとか、年少児の世話をさせるための積極的な働きかけも必要ではあるが年少児との関わりの中で、本人自身が気づく機会を作ることも重要であろう。

古城加代子(2003)は、年長児から世話をされることで心の安定を取り戻した年少児の例を報告しており、周囲から暖かく受け入れられている自分を感じることの重要性を示唆している。

#### (4) 積極的に年上の子の活動を模倣して仲間に入る子

① 「3, 4歳児でいっしょにあわあそびをしていたところ4歳Rくんがラッパの形の遊具にあわを詰め、手で押し出し「あわでっぽうだ!」と喜ぶ姿を見て、3歳のMくんが同じように模倣して「せんせい、ほら、ぼくもしょうずでしょう!」と得意気で、その後もRくんのそばであそんでいた。」

② 「降園時、異年齢で保育者が中心となり集団あそびが始まると『Mちゃんも!』と言って、最近会話が上手にできるようになった2歳Mちゃんが仲間に入ってくる。中でも、あぶくたったのあそびが大好きで3, 4歳児の身振手振りを真似て『むしゃむしゃ』『カギ、がちゃがちゃ』などと言い、異年齢の中で楽しくあそぶことができる。」

「年上の子のあそびを、いつもあこがれの

まなざしで見ている楽しいことはいっしょにしてみようとする姿が見られる。」

年少児が年長児の行動を真似して、多くのことを学ぶモデリングは、異年齢保育の醍醐味であり、重要な側面である。このような例は枚挙にいとまはない(現代と保育編集部(編)、1999。鈴木政次郎・高杉自子・荒井湧(編)、1982)。

#### (5) 異年齢で遊べる環境・活動

① 「リングトンネルやカラーリングを使った運動あそびではとても興味を持ち、異年齢の中に入っても順番に並び自分の番を待つこともできた(3歳児男児)。」

② 「ゲームあそびの際、上の子から手をつながれることをいやがった2歳児(女児)であったが、自分のグループがぞうグループだということがペンダントやカードで理解できると、年上の子からの誘いかけにいやがることもなく、いっしょに短い時間だったがあそびを楽しむことができた。」

「まだ、子ども同士のかかわりがうまく持てない年齢の子も自分の興味のある遊具ということから、あそびに入っていくことができた。友だち同士の中でトラブルの多い3歳児も好きなあそびに関しては、待つ、我慢することも苦にならないようだ。」

異年齢保育を行う上でのひとつのポイントは、どのような活動が異年齢で行いやすいかという点である。上記の例でいえば年少児が好きな遊びを年長児が付き合ってくれるかどうかという点がかなり重要だが、子どもの欲求や、興味関心によって多様な関わりが持てる活動も有効なようである。椋山ひとみ・中野智美(2004)、椎屋仁美(2000)などの自然を生かした遊び、柳恵子(2004)、山元ルミ(2003)、藤森平司2000のコーナーを使った保育、さらに藤明美(2000)などに見られる同じ活動でも関わり方が多様にある遊

びなどが異年齢保育に取り入れられやすい活動である(高橋恵美子・藤戸純子、2002)

## ま と め

この保育園では異年齢保育を取り入れてきた結果の反省を含めて、次のようにまとめている。

「子ども同士のあそびを充実させようと取り組んできた段階で、上の子が下の子へ自然とやさしく接している姿を目にし、異年齢とのかかわりからあそびが充実できないのかと異年齢交流に力を入れるようになってきた。その中で大きな問題点としてでてきたことは、(1)職員間での異年齢保育に対する共通理解の必要性、(2)代替職員との連携の取り方、(3)2歳以下の幼児の位置づけ;今まで通りの保育で良いか、さらに重要な点は(4)異年齢保育の活動をいかに充実させるかと言った点である。

異年齢同士の自然なかかわりを望んではいても、その中で保育者の働きかけはとて必要なことです。しかし、設定した保育の中で子ども達がやらされている感じに思え保育者自身の心の葛藤がありました。異年齢交流自体が楽しめるものでなければならぬという思いから、入れない子に対する対処ばかりを追求し、結局は保育者自身が楽しめなかったり、全体を動かすことばかりに気をとられ、ひとりひとりの心の動きを読みとれない部分もありました。」

異年齢保育が年齢別保育と対立した保育形態として捉えてしまったため、子どもたちは異年齢保育の時間は異年齢で遊ぶことを強制されてしまう。さらに保育士もせつかく時間を確保したのだから異年齢でしかできないことを、この時間に取り組もうとして焦りばかりが出てしまうことになってしまうのである(汐見、1995)。ただ例えば1週間に1～2回の短時間で異年齢保育に取り組もうとすると、どうしてもこのようなことは起こりがちである。

ここで考えなければならないことは、保育士から全員に直接教えることが、指導や援助ではない点で

ある。観察学習によって、他の子が異年齢で楽しく遊んでいる姿を見せることも、子どもたちが異年齢で遊ぶ子とを学ぶ方法のひとつであることを忘れてはならない。あくまでも異年齢で遊ぶことになれていない子どもたちに、遊ぶきっかけとしてこの時間を提供できれば良いのである。その意味で、この時間にある子どもたちが同年齢で遊ぶことを禁止するというのは行き過ぎであろう。ただし、ではやりたい者だけがやれば良いというものではない。保育士が伝えたいことは全力をあげて試みなければならぬし、子どもの興味や関心だけに頼る保育は無責任である。このような点について、この保育園のまとめには次のような記録がある。

「異年齢交流に取り組んで見えてきたこととして、

### ① あそびの展開方法について

保育園全体(未満児～4歳児)の交流を先ず考えてしまい、あそびによっては年齢的に無理がありまとまらなかつたり、年下の子に合わせすぎて年上の子は興味を示さなかつたりなど、どうかたちで子どもたちを満足させていくのが難しいところでした。年上の子にとっては、勝ち負けのはっきりしたあそびなどはとても興味を示すのですが、年下の子にとってはルールを十分理解できず、いっしょに楽しむことができず圧倒された感じで終わってしまいました。しかし、わらべうたあそびなどはどの年齢でもすぐに入ることができ、子ども同士のかかわりも十分見られてきました。

また、人数的な問題もあるようで、少人数のグループでの活動の方が子どもたちのかかわりも見られ、落ち着いて取り組めていました。また、設定した時間だけでなく、自由あそびなど保育者が誘いながらあそびを展開し、誘い続けることによって、子ども達も少しずつ変わってきて、卒園前になると保育者が入らなくても、自分達であそびを展開できる子もでてきました。

## ② 子どもの心の理解

あそびに入れないうちの子の気持ちを先ず考えるべきでしたが、あそびに何とか入れることばかりを優先させて、異年齢交流に抵抗を示すようになり、反省させられました。また、保育者同士の連携がうまくとれていなかったために、あそびがうまく展開せず、どういふふうにもっていくかということばかりに気をとられ、結局子どもたちといっしょに楽しむ活動になりませんでした。異年齢交流では、保育者の働きかけは重要なことですが、ひとりひとりの心の動きを読みとりながら、保育者自身がゆとりをもって子どもたちに接していくことが大事だと思いました。

## ③ 園内研修のあり方

また、職員研修が反省点ばかりを追求する場になってしまい、お互いの率直な意見を述べるのが難しく、保育者に負担がかかってしまったなど、数多くの反省がでてきて今ひとつひとつ解決に向けて試行錯誤を繰り返しています。

ポイントは、異年齢で遊ぶためには、わらべうた遊びのように年齢を問わない、つまりひとつの遊びに多様な関わり方ができる遊びが有効であること、異年齢保育の時間が異年齢にこだわらず遊べる場であること、小人数での活動の方が比較的活動しやすいこと、などが上げられる。

そして現在の取り組みと現状について、次ぎのようにまとめている。

「現在は、3、4歳児を中心にあそびや生活の場を設け、未満児はその様子を興味深く見ながら生活しているので、今後は交流をもてる場には未満児も参加させていきたいと思っています。

異年齢交流を通して今まで見えなかったひとりひとりの発達段階の違いや、子どもの姿が見えるようになり、持続していくことがいかに大切なことということが分かり、これからの方向性が

少し見えてきたような気がします。

異年齢交流の中で子どもたちが変わってきたことは、やさしさ、いたわり、あこがれ自信、いとおしさなどの気持ちが養われることはもちろんですが、最近、子どもたちの口から「いっしょって たのしいね」「〇〇くみさんにいってもいい？」などと言う言葉がよく聞かれるようになりました。

その子にとって安心できる場所、環境をつくるには、どの年齢にも自由にかかわれるようなゆるやかなあそびの展開を園全体で話し合い、ひとりひとりの子どものそだちを見守っていくことが大切だと思いました。

保育者が意図的にあそびに誘い、繰り返し誘い続けることで、いろいろなあそびの楽しさを体験させることが今後の課題だと思います。今後も試行錯誤を繰り返しながら形にとらわれず、子どもたちが縦と横の緩やかな関係を築いていけるよう、一歩、一歩踏みだし、長い目できちんと見ていきたいと思っています。」

このまとめの中に「どの年齢も自由に関われるようなゆるやかな遊び環境」が「子どもにとって安心できる環境」であることが指摘されている。とはいっても「自由に関われる」ためには、ただ単に異年齢の子どもたちを一緒にしておけば良いというものではない。家庭内のきょうだい関係を維持できるのは、親がきょうだい関係を保つためにさまざまな、そして継続的にアドヴァイス（しつけ）をしているからである。その意味でも保育士の関わりは非常に重要であるが、子ども自身が自分の力で解決していく力を育てるためには、自分で考え行動する時間と場所を与える必要があることも付け加えておかなければならない。この点で椎屋（2000）は口頭発表の中で「異年齢保育を続けることで、子どもにかける保育士の手間が少なくなって、仕事が軽減されているような気がする」と述べている。まさに子ども自身が学び合う中で成長している姿を表しているので



はないだろうか。

さらに付け加えれば、会沢美鈴（2002）が指摘しているように、年下の子の世話をいやがる子、世話をされるのがいやな子など、発達段階や経験によってさまざまな姿を見せる。この時、年長児はお世話をする役、年長児はお世話をされる役という固定化した役割分担を想定しては保育にならない。

異年齢保育を実施する目的は、いくつかに分類できる。まず第一は少子化による子どもたちの社会性、特に仲間関係の形成にマイナスの影響があるという心配によるもの、第二に、少子化は特に過疎地の保育園に致命的な影響を与えており（平石早賀美、2003。中路秀暢、2003。和島泰則、2002）、園児の減少で同年齢保育が不可能になってしまったためやむを得ず導入するというもの、第三は少子化の問題とは関係なく、多様な仲間関係の形成や自我の発達にプラスの影響を期待するものである。この第二のケースは、保育園の職員に異年齢保育に対する理解がなければ、年齢別保育にこだわり導入に消極的であったり（光永了円、2000）、場合によっては年齢別でクラス編成ができる人数になったとたん異年齢クラスを廃止すると言ったことがおこる。

異年齢保育の導入で常に問題になるのは年長児（一般には5歳児）の発達保障という問題である。つまり下の子とばかり遊んでいては伸びるものも伸びないのではないかと、という保護者からのクレームである。異年齢保育の導入で最も強い反対の理由と言える。そのような問題に対応するため、年長児だけの年齢別保育や特別な課題を設けている保育園は多い（本間岩、2001。椎屋仁美、2000。桐谷浩一・松田有紀、2000。緒方三桐、2001）。また同年齢クラス編成で、一週間あるいは一月に何回か異年齢保育の時間を作るという方法も多い（鈴木政次郎・高杉自子・荒井洌（編）、1982）

また異年齢クラス編成の場合、異年齢で遊ぶことができるためにも同年齢での遊びが大切だという指摘は重要である（緒方三桐、2001、川上隆子 2003）

年長児の問題では、小人数の保育園には同年齢の

子どもが少ないということから、年長児の成長を促すために、他園児の5歳児と交流を行いたくましく成長したという報告がある（中松隆子、2001）。小規模保育園では異年齢保育の問題よりも同年齢保育ができないという問題のほうが深刻である。そのため地域の幼稚園や保育園との交流を行っているところも多い（松山令子、2004。坪井敏純・田平まゆみ、2003）

異年齢保育は障害児保育や外国籍の子どもの保育と共通するところがある。例えば異質な人間やある意味では明らかな弱者との関わりが要求され、保育士自身も従来から行なってきた年齢別保育の方法では対応できない事が多く含まれている。言い方を変えれば、今まで日本の保育が排除してきた、あるいは忘れていた問題を共通して含んでいるのではないだろうか。

#### 引用文献

- 会沢美鈴 2002 「きょうだいのような関係」づくりから見えてきたもの 第33回九州保育団体合同研究集会提案集
- 平石早賀美 2003 過疎地における保育実践 第6回全国過疎地保育サミット第2分科会資料、14～15
- 本間岩 2001 過疎地における保育実践～五十川保育園流異年齢保育 第5回全国過疎地保育サミット第2分科会資料、16～23
- 藤明美 2000 グループ保育の楽しさと成長 平成11年度鹿児島県保育事業研究大会発表論文集、52～55
- 藤岡教子 2003 どうしたらいい！？初めての異年齢クラスー子どもたちの姿から見えてきたものー 第34回九州保育団体合同研究集会提案集、91～92
- 藤森平司 2000 縦割り保育でない異年齢保育 21世紀型保育のススメ 世界文化社
- 石田圭子 2001 萌ちゃんもミルク飲みよった?! 第32回九州保育団体合同研究集会提案集、80～81
- 椛山ひとみ・中野智美 2004 自然の中での自由遊び 第35回九州保育団体合同研究集会提案集、82～83
- 川上隆子 2003 集団遊びを通してーそれぞれの年齢が

- もっと楽しくー 第34回九州保育団体合同研究集会提案集、89～90
- 桐谷浩一・松田有紀 2000 なっちゃんだって、できるもん 第31回九州保育団体合同研究集会提案集、80～81
- 古城加代子 2003 たてわり保育の中で軽度障害の子どもは今・・・平成14年度鹿児島県保育事業研究大会発表論文集、52～53
- 香田正子 2004 異年齢集団で育ったK君 第35回九州保育団体合同研究集会提案集、78～79
- こんな時どうする異年齢保育 現代と保育編集部（編）  
ひとなる書房
- 牧瀬由美子 2003 統合に向けて4園の交流を深める 平成15年度鹿児島県保育事業研究大会発表論文集、38～39
- 松山令子 2004 過疎地における保育実践 第7回全国過疎地保育サミット分科会資料、22～23
- 三島美貴 2004 縦割り保育とY君 第35回九州保育団体合同研究集会提案集、80～81
- 光永了円 2000 過疎地における保育実践 第4回全国過疎地保育サミット第2分科会資料
- 森真理 2002 第2章 幼児教育の課題 新しい時代の幼児教育 小田豊・榎沢良彦（編） 有斐閣
- 中松隆子 2001 勇気と自信をもらった交流保育～少規模保育園における交流保育～ 第32回九州保育団体合同研究集会提案集、82～83
- 中路秀暢 2003 過疎地の保育所経営 第6回全国過疎地保育サミット第1分科会資料、8～9
- 緒方三桐 2001 同年齢の充実が異年齢パワーの蓄えに 第32回九州保育団体合同研究集会提案集、78～79
- 権屋仁美 2000 過疎地における保育実践ー自然の中で育つ豊かな心ー 第4回全国過疎地保育サミット第2分科会資料
- 汐見稔幸 1995 その子らしさを生かす・育てる保育  
あいゆうびい
- 高橋恵美子・藤戸純子 2002 コミュニケーションの力を育てる異年齢保育 エイデル研究所
- 縦割り保育 1982 鈴木政次郎・高杉自子・荒井洌（編）  
チャイルド社
- 東郷美之 2003 運動会を通しての異年齢交流の実践 平成14年度鹿児島県保育事業研究大会発表論文集、64～653
- 坪井敏純・田平まゆみ 2003 交流保育における仲間関係の形成とその過程 鹿児島女子短期大学附属南九州科学研究所、19、25～32
- 上野勝子 2004 響きあい育ちあう子どもたち 平成15年度鹿児島県保育事業研究大会発表論文集、62～63
- 上野千津 2003 保育園に赤ちゃんが来た 平成14年度鹿児島県保育事業研究大会発表論文集、44～45
- 和島泰則 2002 過疎地の保育所運営～一法人多施設経営 法人合併の経緯 第5回全国過疎地保育サミット第1分科会資料、11～15
- 山元ルミ 2003 自由保育について 平成14年度鹿児島県保育事業研究大会発表論文集、60～61
- 柳恵子 2004 遊び中心の保育実践から見えてきたこと 平成15年度鹿児島県保育事業研究大会発表論文集、56～57
- 矢田法子 2000 異年齢保育に見る自信と葛藤 第31回九州保育団体合同研究集会提案集、82～83
- 米倉茂子 2004 共に育つ～障害児保育を通して～ 平成15年度鹿児島県保育事業研究大会発表論文集、64～65

(200411年月26日受理)